

2011年11月16日(水曜日)

—歴史に学び、未来を展望する—

「県都のデザイン戦略」 議論をスタート

県と福井市では、長期的な展望を持ち、県都福井の将来の姿を再設計する「県都デザイン戦略」の議論を新たにスタート。先人がいかに現在の「まち」の礎を築いてきたか、その歴史を学び、次世代に引き継ぐ「まち」をどのように創り上げていくか。

今後50年を見すえたまちづくりについて、県民の皆さんと一緒に考えていくため、10月18日に「県都デザインフォーラム」を開催しました。今回は、当日の様相を紹介します。



開会あいさつ



福井県知事
西川 一誠

戦災、震災から60年余りが経過し、福井市をはじめ各都市が本格的に次の時代のまちづくり、リニューアルの時期を迎えています。また、平成26年度には北陸新幹線の金沢開業が予定されるなど、都市間競争がますます大きな課題となります。こうしたことから、今後30年、50年という長期的な視点で県都のまちづくりをどのように進めていくか、さまざまな観点から検討し、県民が一つの目標として共有できる「県都のデザイン戦略」を描くことが重要です。

福井駅周辺は、行政、経済の機能等がコンパクトにまとまった全国的にも珍しい構造であり、こうした特性を積極的に活かしながら、全国にアピールできる個性的なデザインを描くべきと考えています。

まちづくりは、地元の皆様が頑張り、行政と力を合わせて初めて実現できるものです。皆様には、いろいろな意見を交わしていただき、またそれを周囲にも広げていただきたい。一人ひとりが力になることで、必ず素晴らしいまちづくりができると期待しています。



福井市長
東村 新一

次の50年を見すえ、福井県と福井市が協力して中長期の「県都デザイン戦略」についての議論を開始しました。

重要な視点としては、福井市中心部に残された最大の歴史遺産である城址周辺をどのようにするのか。いろいろな機能がコンパクトにまとまった中心市街地に隣接する足羽川や足羽山の自然をどう活かすのか。そして、これらの資産を活かしながら、県都の玄関口にふさわしい都市景観をどうデザインしていくか。これら三つの視点を、市民の皆様と同じ目線を持ちながら議論し、ともに考えていく必要があります。

県都の顔となるまちづくりの方向性について県と市が意識を共有し、長期的なビジョンを描かなければ実効性のあるものにはなりません。多くの方々のご意見をお聴きしながら、県とともに方向性を出していきたいと思えます。

基調講演

「福井の戦後復興と今後のまちづくり」

西村 幸夫 氏
(東京大学副学長・教授)

工学博士、専門は都市計画、都市保全計画、市民主体のまちづくり論など



まちづくりの記憶

福井のまちは戦災、震災があったため、歴史的なものはあまり残っていないと思われがちですが、いろいろなところに先人たちのまちづくりの形跡や手がかりがしっかりと残されています。

例えば、江戸時代には福井城の「百間堀(ひゃっけんぼり)」がありました。現在の福井駅の正面を横切る道路は、百間堀を埋め立てて整備された名残で、現在でも曲がっています。歴史的に重要であるにも関わらず、このような記憶は時間がたつと忘れられてしまいます。この道にはまだ名称が付いていないようです。「百間堀通り」などとすると、歴史的なイメージが持てるのではないのでしょうか。

また、福井駅の正面からは、中央大通りも福

まちの名残を現代的にデザイン

大名町交差点は、まちの中心として計画され、今でも賑わいがありますが、ここには素晴らしいロータリーがありました。また、福井駅から大名町交差点につながる中央大通りは、かつて側道が設置されるなど、非常に立派な道路でした。

このような素晴らしいまちの名残を、現代的にデザインし直して、さらに、大名町交差点で何かロータリーに代わる魅力的な空間ができる、まちの価値が高まると思います。

また、他のお城のあるまちでは、城を見えるようにするか、そばに幹線道路を整備する

歴史の共有から始める

まちづくりでは、夢を語ることも大切ですが、夢だけではだめです。個人個人の夢で終わってしまい、みんなで合意ができません。先人の思い、現在の姿、将来目指しているものが分かってくれば、一つの流れが生まれます。流れに沿って考えると、方向性が見えてきます。過去が大事です。

歴史は、行政だけでなく、県民の皆さんと共有しなければなりません。共有できれば、かなりの部分は次のステップに進めるのではないのでしょうか。そのためには、さまざまな形で議論して、広げていくことが大事です。

井城址も見えませんが、少し北側に立つと、両方ともはっきりと見通せるようになります。戦後、駅舎を北側にずらす計画もあったようですが、実行できなかったようです。視点を変わると、いろいろなまちづくりの歴史が今後の手がかりとして見えてきます。まちづくりに対する先人たちの思い、実現できたり実現できなかったことなども含めて、形になって表れているものです。

都市計画を行いました。福井ではそのようになっています。福井は、福井城址の周囲が幹線道路になっていないことを活かし、人が歩けるような21世紀型の「掘端通り」として整備してもいいのではないのでしょうか。

50年先を見ることは、これまでなかなかありませんでした。このまちをどうしていきたいのか、どのようなまちが望ましいのかを単に希望するだけでなく、しっかりと事実や観察に基づいて提案されると、これから本当に良くなると思います。

特別
講演

「由布院40年 のまちづくり」

桑野 和泉 氏
(由布院温泉観光協会会長・
(株)玉の湯 代表取締役社長)



大分県の由布院温泉で旅館を営むかたわら、まちづくりなど、市民グループの代表や世話人を務める

まちづくり100年の計

由布院では、今から約90年前の1924年に本多静六先生の講演会が開催され、この講演録を読んだ私たちの親の世代が、1970年代、実際にドイツの保養温泉地へ視察に行きました。

現在でも、ドイツの小さな温泉地の方々は、「まちづくりは100年かかるかもしれないが、今いる市民一人ひとりが動かないと、何も始まらない」と口々に言うのです。まちづくりを行っていくということは、そのような覚悟を持って、100年単位で行うということなのです。

まちに出会いの場をつくる

由布院は人口1万人ですが、観光客は年間380万人。90万人が宿泊客で、その6割がリピーターです。1割の方は10回以上も由布院にお越しになっています。

由布院では、滞在型保養温泉地を目指そうと、まずは出会いの場をつくることから始めました。外の人が地域に入ってくることで、自分たちのまちの強み、弱みが分かります。交流するだけでなく、外の人と一緒にワクワクすることも大切です。由布院では映画祭を37年続けています。音楽祭は35年間開催してきました。滞在型を目指すのであれば、そこにしかない楽しさや時間が必要です。

若い世代がまちづくりに関わる

由布院の観光協会の中心は、30代の若い人に移っています。若い世代がまちづくりの中心にいて、決断できるということは大きなことです。60、70代も30代の若者と一緒に食事をしたり、議論しています。まちづくりは、あらゆる世代が関わらなければなりません。どの世代も一緒に議論する場を地域内で持つことが重要だと思います。

また、同じ目線で一緒に議論し、まちづくりに参加してくれる外の人たちの存在が必要です。地元の人には現場のことはよく分かっていますが、まちの20年後、30年後のことについては、いろいろな専門家の方にも参加していただいて、一緒に議論していくことが大切です。

昭和の終わりごろ、由布院には大きな開発の波がありました。そこで、由布院盆地の環境を守ろうと、市民も関わって条例を制定しました。自分たちが考えた条例なので、その後の活動が違います。看板一つにしても、計画の段階から考えるようになりました。土産店が看板を変えるなど、まちの中が変わると市民一人ひとりも変わるものです。

あきらめないで議論を続ける

40年間、まちの人たちが議論し続けてきて、いつも前に進んでいるかという、そうとは言い切れません。9割の人が賛成することはなく、いつも6割から7割ですが、みんなで議論しています。由布院が抱える問題は、昭和40年代から変わらず、議論の場を持ち続けながら、あきらめずに議論を続けています。あきらめないことが重要なのです。

意見
交換会

「住民主役のまちづくり」

コーディネーター



川上 洋司 氏
(福井大学大学院
工学研究科教授・工
学博士)

パネラー

西村 幸夫 氏
(東京大学
副学長・教授)



桑野 和泉 氏
(由布院温泉
観光協会会長)

開発 毅 氏
(こみちこまち浜町
推進会議代表)



下川 勇 氏
(福井工業大学 准
教授・工学博士)

議論の積み重ねと共有

川上氏

福井は戦災、震災復興で戦後、昭和の時代には、近代的なインフラづくりという意味でのトップランナーを走ってきました。

また、平成元年から駅周辺の再区画整理をして、新たに造り変えている。そういう意味では、第2の福井再構築から20数年が経過しています。改めて今ある都市を、過去の資産を活かし、良い形で残

住民と行政がともに

川上氏

していくことが問われているのです。まさに新しいまちづくりのスタート地点に立っているのではないのでしょうか。

開発氏

中心部には活気がないのかというと、そうではなくて、やはりそこに住む人たち、訪れる人たちの関係性が希薄になってきているということだと思います。

私も、浜町地区を守ろうということで、幸橋から九十九(つくも)橋までの足羽川北側のエリアを「浜町界隈」と名付けて、一帯の景観形成地区としての指定を目指してきました。住民の皆様方のお力添え、コンセンサスの形成のもとにそれが実現したわけです。景観形成地区に合わせた街路の整備を行って、この夏に一部完成し、日の目を見たところです。

下川氏

今年の7月に、灯(あか)りイベントを行っている団体の方々に、一緒に福井の「灯り文化」を発展継承していくような動きをつくらうと働きかけ、組織をつくって活動しています。もともと組織力がある郊外の方々と、あまり組織力がないまちなかの方々が、同じテーブルに着いて議論をすると、文化が違うのでしょう。なかなか意見がまとまらず、ぶつかるのです。

ただ、そこから生まれてきたものが大変素晴らしいもので、おそらく違う感性を持った方々が集合すると、新しい感性がそこで生まれて、それをまた地域へ持って帰ってもらくと、地域内で新しい議論が行われて、どんどん発展していくのです。そのようなやり方を通じて、福井のまちづくりに活かせる方法がないか検証しているところです。

西村氏

浜町界隈で言えば、足羽川に素晴らしい桜並木があります。この桜並木も数年前に再整備をしましたが、その時もいろいろな意見があって、答えもそれぞれ違っていたと思います。当時、どうい議論があって、どう扱おうとしていたのか、維持するためにどのような努力があったのか、みんなで共有することが大事です。

いずれ桜の寿命がきて、次にどうするのかという議論になった時、過去の議論を共有し、みんなが関心を持っていれば、意見を言えます。すべての方が賛成することにはならないかもしれませんが、議論が積み重なってくれば、選択すべき方向が見えてきます。

桑野氏

由布院は1万人ぐらいの小さなまちなので、よく人が歩いていきます。まちを歩く人が多いと、それだけまちを見られます。自分のまちの365日、日々の変化が分かるのは住んでいる人の責任だと思います。

単純なことですが、自分のまちをどのくらいの人が歩いているか、歩く中で外の人とどうつながっていくか。大きな何かをするのではなく、それぞれの家の庭のちよつと先で人がつながっていけば、いろいろなことが情報共有できます。まちづくりにおいて、お互いが時間を共有することは非常に大事なことです。

今後、住民主役のまちづくり、あるいは「県都デザイン戦略」の策定を進めていく上で大事なことは何でしょうか。

下川氏

まちづくりの話になると、いつも、一体誰がやるのかという話になります。行政がイニシアチブをとって行く領域と、住民がイニシアチブをとれる領域があります。そこが今まで分離されていて、自分たちの地区でまちづくりをやっている人たちは自分たちの領域を越えないし、そこには行政も目を向けられないという関係でした。

ある地区の方に、自らの手で守っているお祭りなどを紹介してもらった時に、私が「これは県や市のマスタープランに沿っていますね」と話すと、皆さん驚いて、自分たちがやっていることは行政がやろうとしている方向性に沿ったことだと気付くことがあります。そうなれば、さらに行動を発展させる可能性が出てきます。これこそ、行政と住民が歩み寄れるゾーンではないかと思っています。

開発氏

県も市も「デザイン」という言葉を使い始めました。私たちも、やはり大計というか、ハードのインフラのデザインだけではなく、そこにスタンスや考え方なども含めてデザインを再構築しないと、これは絵に描いた餅になりかねないという危機感を強くしています。

大計にのっつって、あえてその道を突き進むリスクをとるという姿勢が、果たしてこの福井にあるだろうかと痛感しています。ぜひ、大計にのっつたデザインを、これからみんなでつくらせていただきたいと思います。

まちづくりへの熱意

桑野氏

住民主体のまちづくりというのは、本気である人がどれくらいいるかです。本気で、一生を懸けてこれをやり抜く覚悟を持っている人の周りにまた人が集まれば良いのであって、それは地域の中だけではなく、応援団が外から励ますといった関係性があることが重要です。その姿を見て、地域の人たちも変わってきますし、大きなビジョン、大きな流れの中で自分の中のこれをやっていくのだという、連動性のあることが大事なのだと思います。

西村氏

まず、地元の人が本気にならないといけません。行政にプレッシャーをかけられる熱意が必要で、そういった熱意があれば、我々のように、外の人も応援したくなると思います。

川上氏

自分たちのまちは自分たちでつくるという覚悟、そこから始めていくことが大切でしょう。まずは、県民一人ひとりが日々の生活の中で、まちを見るという姿勢を持つことから始めてはどうか。

また、過去の資産に対して敬意を持って接して、将来に向けて、子や孫にどう継承していくかという責務を共有できれば、住民主役のまちづくりのスタートになり、持続可能なまちづくりのプロセスが生まれてくると思います。

今回のフォーラムの様子は、福井ケーブルテレビ、さかいケーブルテレビのコミュニティチャンネルにて放映予定です。ぜひご覧ください。

(放映予定日)

12月11・12・14・16・20・22・24日

まちづくり活動団体の情報を募集します!

福井市内で行っているまちづくり活動等を、県・市のホームページでご紹介します。

例えば…

- 地域の歴史を学び、発掘し、地域のまちづくりに活用しようとする団体
- 地域の景観や美観の維持・向上のため、活動している団体
- 地域の活性化のため、独自のイベント活動等を行っている団体
- 若者等にまちづくりへの関心を持ってもらうため、情報発信を行っている団体

など

必要事項を
記載の上、
ご提出
ください。

[申込様式]

<http://www.npo-fukuicity.jp/>

[問合せ先]

・福井市市民生活部市民協働・国際室(TEL 0776-20-5300)

・福井市NPO支援センター(TEL 0776-97-5065)

この記事に関するお問い合わせは、福井県総合政策部政策推進課 0776(20)0225 までどうぞ

 **BACK**